



Title	『古今和歌集』の『万葉集』享受
Author(s)	川上, 莉奈
Citation	詞林. 2021, 70, p. 1-26
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85122
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『古今和歌集』の『万葉集』享受

川上 莉奈

はじめに

『古今集』仮名序には、終盤の集編纂について述べている箇所⁽¹⁾に、以下のような記述がある。

…延喜五年四月十八日に、大内記紀友則、御書所預紀貫之、前甲斐少目凡河内躬恒、右衛門府生壬生忠岑らにおほせられて、万葉集に入らぬ古き歌、みづからのをも奉らしめたまひてなむ、それが中にも、梅をかざすよりはじめて、ほととぎすを聞き、紅葉を折り、雪を見るにいたるまで、また、鶴亀につけて君を思ひ、人をも祝ひ、秋萩夏草を見て妻を恋ひ、逢坂山に至りて手向けを折り、あるは春夏秋冬にも入らぬくさぐさの歌をなむえらばせたまひける。すべて千歌、二十卷、名づけて古今和歌集といふ。…

傍線箇所について言葉通りに受け取るのであれば、『古今集』は『万葉集』の歌を採録していない、ということになる。

その一方で、『古今集』には『万葉集』所収の和歌が採録されている、と古くから指摘されている。それに伴い、『古今集』中の『万葉集』の歌がなぜ『古今集』に収載されてしまったのか、という原因について考察されてきた。

本論考では、この仮名序の記述との矛盾について、先行研究を整理し、問題点を確認したうえで、改めて『古今集』中の『万葉集』の歌と考えられた歌に分析を加える。それにより、これらの歌が『万葉集』収載の歌ではなく、『万葉集』の歌を利用した歌に過ぎないことを明らかにする。また、『万葉集』の歌の利用が、『古今集』の他の歌にも見られる事を指摘し、『古今集』における『万葉集』享受の一端を明らかにすることを目的とする。

なお、小川靖彦⁽²⁾氏の先行研究によれば、これまで『古今集』中の『万葉集』の歌と指摘されてきた歌は以下の十九首である。『古今集』の和歌と、もとの『万葉集』の歌とされるものを掲げる。

①

(題知らず)

よみ人知らず

さ夜中と夜はふけぬらし雁がねのきこゆる空に月わたる
見ゆ

〔古今集〕秋歌上・192

献 弓削皇子 歌三首

佐宵中等夜者深去良斯鴈音所聞空月渡見

〔万葉集〕卷九・1701

②

(題知らず)

よみ人知らず

月草に衣はすらむ朝露にぬれてのちはうつろひぬとも
月草尔衣者将摺朝露尔所沾而後者徙去友

〔古今集〕秋歌上・247

③

(題知らず)

よみ人知らず

駿河なる田子の浦波立たぬ日はあれども君を恋ひぬ日は
なし

〔古今集〕恋歌一・489

可良等麻里能許乃宇良奈美多々奴日者安礼杼母伊敝尔古
非奴日者奈之

〔万葉集〕卷十五・3670

④

(題知らず)

よみ人知らず

吉野川岩きりとほし行く水の音にはたてじ恋ひは死ぬとも
も

〔古今集〕恋歌一・492

高山之石本瀧千逝水之音尔者不立戀而雖死

〔万葉集〕卷十一・2718

⑤

(題知らず)

よみ人知らず

奥山の菅の根しのぎ降る雪の消ぬとかいはむ恋のしげき

に

〔古今集〕恋歌一・551

三國真人之足歌一首

高山之菅葉之努藝零雪之消跡可曰毛戀乃繁鷄鳩

〔万葉集〕卷八・1655

⑥

(題知らず)

よみ人知らず

伊勢の海人の朝な夕なにかづくてふみるめに人をあくよ
しもがな

〔古今集〕恋歌四・683

伊勢乃白水郎之朝魚夕菜尔潜云鰈貝之獨念荷指天

〔万葉集〕卷十一・2798

⑦

(題知らず)

よみ人知らず

夏引きの手引きの糸をくりかへし言しげくとも絶えむと
思ふな

この歌は返しによみてたてまつりけるとなむ

〔古今集〕恋歌四・703

寄 絲

河内女之手染之絲乎絡反片絲尔雖有將絶跡念也

〔万葉集〕卷七・1316

⑧

(題知らず)

よみ人知らず

たえずゆく飛鳥の川のようにみなば心あるとや人の思はむ
この歌、ある人のいはく、中臣東人が歌なり

〔古今集〕恋歌四・720

寄 河

不絶逝明日香川之不逝有者故霜有如人之見國

⑨

（題知らず）

〔万葉集〕巻七・1379
よみ人知らず

須磨の海人の塩焼き衣箆をあらみ間遠にあれや君が来ま
さぬ
〔古今集〕恋歌五・758

大網公人主宴吟歌一首
須麻乃海人の塩焼衣乃藤服間遠之有者未著穢

〔万葉集〕巻三・413

⑩

しはつ山ぶり

しはつ山うち出でて見れば笠結ひの島漕ぎ隠る棚なし小
舟
〔古今集〕大歌所御歌・1073
四極山打越見者笠縫之嶋榜隠棚無小船

〔万葉集〕巻三・272

⑪

ひるめの歌

ささのくま檜隈川に駒とめてしばし水かへ影をだに見む
〔古今集〕大歌所御歌・1080
左檜隈檜隈河尔駐馬尔水令飲吾外将見

〔万葉集〕巻十二・3097

⑫

（かへしものの歌）

まかねふく吉備の中山帯にせる細谷川の音のさやけさ
この歌は、承和の御嘗に吉備国の歌

〔古今集〕大歌所御歌・1082
おほきみのみかさのやまのおびにせるはそたにがはのおとのさやけさ
大王之御笠山之帯尔為流細谷川之音乃清也

〔万葉集〕巻七・1102

⑬

（奥山の菅の根しのぎ降る雪下）

我妹子にあふさか山のしのすき穂には出でずも恋ひわ
たるかな
〔古今集〕墨滅歌・1107
吾妹兒尔相坂山之皮為酢寸穗庭開不出戀波鳴

〔万葉集〕巻十・2283

⑭

恋しくは下にを思へ紫の下

犬上の鳥籠の山なる名取川いさと答へよわが名もらすな
この歌、ある人、あめのみかどの近江の采女にたま
へると
〔古今集〕墨滅歌・1108
狗上之鳥籠山尔有不知也河不知三五寸許瀬余名告奈

〔万葉集〕巻十一・2710

⑮

深養父 恋ひしとはたが名づけけむことならむ下

貫之

道知らば摘みにも行かむ住の江の岸に生ふてふ恋忘れ草
〔古今集〕墨滅歌・1111
暇有者拾尔将往住吉之岸因云戀忘貝

〔万葉集〕巻七・1147

⑯

（題知らず）

明日よりは若菜摘まむと片岡のあしたの原は今日や焼く
らむ
〔古今集〕異本歌2 昭和切など、20の次。
〔万葉集〕巻八・1427
従明日者春菜将採跡標之野尔昨日毛今日毛雪波布利管

〔万葉集〕巻八・1427

⑰

（題知らず）

よみ人知らず

(18)

しなが鳥猪名野をゆけば有馬山夕霧たちぬ明けぬこの夜
 はしながとり （『古今集』異本歌8 元永本など、408の次。）
 志長鳥居名野乎来者有間山夕霧立宿者無而 一本云
 猪名乃浦廻乎榜来者 （『万葉集』卷七・1140）

(題知らず)

よみ人知らず

須磨の海人の塩焼衣なれぬれば疎くのみこそ思ふべらな
 れ

〔『古今集』異本歌11 元永本、751の次。六条家本など
 649の次。〕

志賀乃白水郎之塩焼衣雖穢戀云物者忘金津毛

（卷十一・2622）

(19)

(題知らず)

よみ人知らず

言出でしは誰ならなくに小山田の苗代水の中よどみする

〔『古今集』異本歌12 元永本など、758の次。〕

紀女郎報贈家持歌一首

事出之者誰言尔有鹿小山田之苗代水乃中与杼尔四手

（『万葉集』卷四・776）

これら十九首について、以下検討していく。

一、先行研究と問題の所在

前節で言及した、『古今集』収載歌と『万葉集』に入らぬ古
 き歌」という記述が矛盾している問題については、近現代の
 研究史では大きく分けて「誤入説」「伝誦された歌、或いは

別資料から採取した説」「その他」という三つの立場から論
 じられてきた。

まず、「誤入説」から見ていく。

古くは、『八雲御抄』の卷二作法部に「古今 不入万葉集哥
 云々 但誤有七首（古今 万葉集に入らぬ哥と云々 但だ誤
 りて七首有り）」という記述がある。順徳院が「誤」を具体
 的にどう考えていたのか不明だが、少なくともこの頃から
 誤って入集されたものだと考えられていた。この考え方は近
 代においても受け継がれ、次に引用する山岸徳平氏や、その
 他に佐々木信綱氏がこの説をとる。

又、前述の如く、古今集中に、万葉集の歌が採取せられ
 て居る。それは既に万葉集が、其の時代の人々から次第
 に遠ざかった為ではあるまいか。…然るに古今集中に
 次の如く十二首採取せられた事は、それが、全然万葉
 集中のものと同一でないにしても、それだけ万葉集に対
 する研究が不十分であつたとも考へられる。古今集の序
 には「万葉集に入らぬ古き歌、みづからのをも奉らしめ
 給ひてなむ云云」と記してあるのだ。即ち貫之、躬恒等
 以下の撰者の、万葉集に対する認識に多少欠けた所があ
 るとすれば、他の人々は一層万葉集から遠ざかった事は
 当然であらう。…

つまり、材料不足に拠るものではなくて、万葉集の研
 究が不十分であり、又、今日の如き索引等も無く、遂に

誤つて入つてしまつたものと見える。

山岸氏が繰り返し述べているように、誤入説では、古今集撰者の理解不足により『万葉集』に誤つて入集した、と捉えられている。

次に「伝誦された歌、或いは別資料から採取した説」を確認する。

この説は、伝誦された歌、もしくは別資料から入集した歌だ、と考える説である。安田喜代門氏⁸⁾が

第一に、今は吾々には見られない、しかも貫之らが見てゐた資料から引抜いたのが、たま／＼万葉から抜いた様に見えることで、たとへば平安時代には、まだ滅んではゐなかつた憶良の類聚歌林や琴歌譜に引かれた古歌抄などの歌集から抜いたのではあるまいかとする考である。

第二に当時、記載せられてはゐなかつた——少くとも、それを貫之らが知らなかつた歌で世に伝誦せられてゐた歌を採つたところ万葉から採つた様に見える場合ができたことで、これもありうべきことではあるが、当時の古歌の伝誦の事情が精しく分らぬ限り一つの仮定説である。と述べたところや、久松潜一氏の説から、諸氏に受け継がれていった様子である。

最後に「その他」の説について確認する。この説は、伊藤博氏が、当時の認識からすれば『古今集』の『万葉集』の歌は『万葉集』の歌ではなかつた、と主張したことに端を発す

るものである。近年では、小川靖彦氏が伊藤氏の立場を受け継ぎつつ、別の方面から考察を加えている。

まず、伊藤氏の論から見ていく。

われわれは、かつて、万葉集の同形、小異の歌について次のような認識が、普遍的に存在していたことを立証した(万葉五十九号拙稿)。

一、いかに僅少であつても、歌辞に相違がある場合は、その歌は、詠歌の「場」(詠手、年代、場所、用途など)を異にする別の歌と認識した。

二、歌辞の同じ歌であつても、詠歌の「場」(詠主、年代、場所、用途など)が相違する場合は、別の歌と認識した。

…これらには、この認識が、万葉時代の人々より一層強く存在している道理である。万葉以来のこのような認識がより強く古今編輯陣の間に存在したからこそ、かれらは、『万葉集』なる文献以外の資料やその後の伝承歌を、「万えふしふにいらぬふるき哥」⁹⁾と確信しえたのである。…そして、事実、古今集には、歌辞と場の両面において万葉歌と一致する歌は一首も存しないのであつた。いわゆる「古今の万葉歌」¹⁰⁾は、以上の観点からいえば、古今の万葉類歌¹¹⁾とこそ称すべきものであつた。

この主張を引き受けつつ、「訓」という観点から考察したのが小川氏である。

『古今和歌集』中の、万葉集歌と歌の意味がほぼ一致する歌は、平安前期の人々が万葉集歌を〈訓み〉、古今集時代の「和歌」としてふさわしいように意識的に改変したものであったと思われる。それらのあるものは早くに筆録され、あるものは「古来の旧歌（真名序）」として、新たに人々の間で伝誦されることになったのであろう。

先行研究の流れは、おおよそ以上の通りである。これらの先行研究には大きく二つの問題点が挙げられる。

第一に、先行研究では「万葉集の歌」「萬葉歌」という言葉が散見するが、これらの語が、『万葉集』収録の歌を指すのか、『万葉集』に近い頃に作られた歌や『万葉集』風の歌を指すのかについて詳しい説明がなく、各研究者がどのような認識で論じているのか把握しにくい。定義の曖昧さに伴い、『古今集』中の『万葉集』歌の認定基準もまた曖昧で、研究者によって『古今集』中の『万葉集』の歌とされた歌に十一〜十七首と開きがでている。

第二に、いずれの先行研究も、近世に田中道麿が二十一代集中にある『万葉集』の歌を指摘した『撰集萬葉徴』を基に、各々が『万葉集』の歌だと考えた歌を論述の対象としている。しかし、『撰集萬葉徴』で指摘された歌も含め、これらの歌が本当に『万葉集』の歌なのか、『万葉集』の歌と見做し得るかについて検討したものがほぼ見受けられない点である。

「その他」で見た伊藤氏や小川氏が一見考えている様子だが、

『万葉集』と『古今集』のそれぞれの歌を一首一首、細かく分析することはしていない。各々が「古今編者の萬葉歌に対する認識がいまだ的確にはさがしあてられていないことを暗示する」「『古今和歌集』の撰者たち（特に貫之）が、万葉集歌でないかと判断した可能性が充分に考えられるのである」と述べるように、「『古今集』の万葉歌」「『万葉集』の歌」を問い直すため「『古今集』編纂当時の人の認識」という点に要因を想定するが、一首一首の分析が足りていないため、その認識のもとに当時の人々がどのように『万葉集』を利用したのかという点が、非常に漠然としている。結局は、問題の歌が『古今集』に紛れ込んだ原因に焦点が当てられている。本論ではこのような先行研究の状況や問題点を踏まえて、以下の検討を行う。

研究者によって『古今集』中の『万葉集』の歌の定義が異なるため、本論では各先行研究の指すところを概括して、「万葉集」に入らぬ古き歌」という記述と矛盾する）『古今集』中の『万葉集』の歌を「語や句の変遷はみられるものの元々は『万葉集』に収載された歌、といえる歌」と定め、〈『万葉集』歌〉と表記する。その上で、先行研究でこれまで指摘された歌が〈『万葉集』歌〉に合致するかどうかを検討していく。そのために、先行研究が対象とした歌と『万葉集』収録の歌を比較し、語や句などで変化している箇所に着目して、変化の様相・原因を分析する。

二. 『古今集』恋歌にみられる『万葉集』の歌の分析

本節では、まず調査方法について説明した後に、実際に個々の和歌について分析を加える。

前節で述べた通り、『古今集』中『万葉集』の歌と認定された歌は研究者によって異なる。そのため本論では、「はじめに」で掲げた十九首すべてを調査対象とした。

このうち、墨滅歌や異本歌については、俊成本・定家本では『古今集』の歌と認識されていないなど疑問点があるため、本論では考察の対象から除外する。また、巻第二十の大歌所御歌は、宮中の儀式の折に歌われた日本古来の歌を収載していることから、『万葉集』の歌と考える必要は無い。

残りは①～⑨であるが、『万葉集』と一致する①②については、後に言及するため、本節では残りの③～⑨を分析する。次に、調査方法だが、先述の③～⑨の恋歌について、主に変化している箇所を中心に語彙や表現の調査を行った。調査には『日本文学web図書館』⁵⁾を主に用いた。奈良～平安時代の和歌に絞って調べたが、基本的には『万葉集』『古今集』の用例と、それらに近い用例を中心に確認した。

先に結論を述べると、右のような調査とそれに基づく分析を行った結果、③～⑨の和歌の殆どは『万葉集』中の歌を利用して新たに作られた別の歌と判断された。これら③～⑨歌は、以下の三通りに分類することができる。

(一) 『万葉集』では使用されたが『古今集』の頃には使用されなくなった語や句を、『古今集』の頃から使われる表現にしたもの

(二) 『万葉集』においても特殊であった表現を変えたもの

(三) 『万葉集』の歌を下敷きにして詠まれたもの

以下、右の分類に基づいて実際に③～⑨の和歌を検討していく。まず、分析の対象となる『古今集』の歌と対応する『万葉集』の歌を掲げる。その後、それぞれの歌の語や句の用例などを示し、最後に〔小括〕として各歌の調査結果をまとめる。

(一) 『万葉集』では使用されたが『古今集』の頃には使用されなくなった語や句を、『古今集』の頃から使われる表現にしたもの

(二) に該当する歌は、④、⑤、⑥、⑨である。④から順に確認していく。

④

(題知らず) よみ人知らず

吉野川岩きりとほし行く水の音にはたてじ恋ひは死ぬとも

なかにあいはるみづのうたにはたてじこひて死ぬ
高山之石本瀧千逝水之音尔者不立恋而雖死

〔万葉集〕巻十一・2718

〔古今集〕恋歌一・492

この二首は、上三句が異なっている。そのため、主にこの異なっている箇所について検討を加える。

【吉野川】『万葉集』中に十四例（「みよしのがは」も含めると十六例）、『古今集』中に当該歌を除いて四例確認できる。『古今集』中の用例を確認すると、

（題知らず） 紀貫之

吉野川岩波高く行く水のはやくぞ人を思ひそめてし

（恋歌一・471）

（題知らず）

よみ人知らず

吉野川水の心ははやくとも滝の音には立てじとぞ思ふ

（恋歌三・651）

のように、流れのはやさと恋を絡めて詠む歌が見られる。『歌ことば歌枕大辞典』（久保田淳・馬場あき子編）の「吉野」の項目では、「吉野川は、『古今集』以後、恋の歌にも詠み込まれ、…吉野川の激流が恋の心情のはげしさの比喩として用いられる例がすくぶる多い」（鈴木日出男）と指摘される。

【高山】「高山」の語は『万葉集』では二十例見られるのに対し、『古今集』では全く見られない。その他、時代の近い用例は『人麿集』一例（但し万葉245歌と同一）、『秋萩帖』一例がみられる。このことから、「高山」は『古今集』の頃には殆ど用いられなくなることがわかる。

【行く水の音にはたてじ恋ひは死ぬとも】似た表現が『万葉集』『古今集』双方に見受けられる。以下にその一部を掲げる。

あしひきのやまがみづのおとに、さむひとのこゆめとこひあたるか
足櫓之山川水之音不出人之子妬戀渡青頭鷄

（『万葉集』卷十二・3017）

（題知らず）

よみ人知らず

山高み下行く水の下にのみながれて恋ひむ恋ひは死ぬとも

（『古今集』恋歌一・494）

「水のように音には出さずに密かに恋しく思う」「水のようにひっそりと恋しく思う」というように水と恋とを絡めた、類型と思われる。

【小括】

古今492歌と万葉2718歌の三～五句目はほぼ同じである。水と恋とを関係させて詠む歌が散見することから、類型表現としてそのまま用いられたと思われる。

一方で古今492歌の一、二句目は、「高山」が平安時代以降には詠まれなくなったため、別の語で詠まれたと見られる。二句目の「石本瀧千」、つまり流れのはやさを示す点と、恋歌である点に着目し、平安時代から激流と恋とを関連付けて使用された「吉野川」を詠んだ。

これらに鑑みると、古今492歌は（『万葉集』歌）と考えることはできない。

⑤

（題知らず）

よみ人知らず

奥山の菅の根しのぎ降る雪の消ぬとかいはむ恋のしげきに

（『古今集』恋歌一・551）

三國真人さ足歌一首
たかやまのすがのはしのきふるゆきのけぬとかいはちこひのしげけく
高山之菅葉之努藝零雪之消跡可曰毛戀乃繁鶏鳩

（『万葉集』卷八・1655）

この二首は、初句が異なっている他、二句目の「菅の根」「菅葉」といった違いが見られる。主に、これらの箇所について検討を加える。

【奥山】「高山」については④で確認した通り、平安時代に入ると用いられない語であった。

「奥山」は、『古今集』七例、『万葉集』十六例が見られる。寺島恒世氏が、『万葉集』での「奥山」は「聖なる異空間としての性格を基本としていたとも見られ」、平安時代以降になると「人里と隔絶された孤独感を伴って詠まれるようになる」と指摘した通り、「奥山」使用の変化もあり、「高山」が「奥山」になったと考えられる。

【菅の根】『万葉集』の「菅の根」の用例は二十一例ある。『古今集』中での用例は見当たらないものの、『後撰集』『拾遺集』や多くの私家集等で用例が確認できる。片桐洋一「歌枕歌」とは辞典 増訂版』には、「菅（すが）とも」の根が長く乱れているところから「長」や「乱る」に掛かる枕詞として用いられることが多かった。：「ねもごろ」に続ける場合もあった。いずれにせよ『万葉集』に始まる表現であるが、平安時代や中世にもほとんどそのままに行われていた。」とある。

『万葉集』の二十一例の「菅の根」との接続を確認すると「ねもごろ」十二例、「ながき」三例、その他六例となり、『歌枕歌』とば辞典 増訂版』の記述に従ってよい。

【菅葉】『万葉集』中の「菅葉」の用例は、当該歌を除くと左の一例のみとなる。

奥山之菅葉凌零雪乃消者將惜雨莫零行年
おくやまのすがのはしのきふるゆきのけなばをしげむあめなふりそね

（卷三・299）

万葉299歌については、上三句が古今551歌と類似するところから、『古今集』の注釈書等で当該の古今551歌と類似すると指摘される。

「菅葉」は、平安時代ではほぼ見られなくなる。

この他『万葉集』で、「しのぐ」との組み合わせで使われる「葉」の用例が確認できる。

奥山之真木葉凌零雪乃零者雖益地尔落日八方
おくやまのまきのはのきふるゆきのふりはまさともつちにおちめやも

（卷六・1010）

子等我手乎卷向山丹春去者木葉凌而霞霏微
こらがてをまきむくやまにはるさればこのはしのきてかすみなひく

（卷十・1815）

【小括】

古今551歌について、「しのぎ」と繋げるならば、『万葉集』での用例からも、意味からも、「菅の」葉の方が妥当である。しかし、万葉1655歌の「菅葉」は古今551歌で「菅の根」になっている。「菅」からの連想として、平安時代には使われない「菅葉」ではなく、『万葉集』以来使われた「菅の根」が出たものと見られる。その結果「しのぎ」とも繋がらなくなってしまった。

このことと、「高山」「奥山」の違いから、古今551歌は『万葉集』歌とはいえない。

⑥

（題知らず）

よみ人知らず

伊勢の海人の朝な夕なにかづくてふみるめに人をあくよしもがな

（古今集）恋歌四・683

伊勢乃白水郎之朝魚夕葉尔潜云鰈貝之獨念荷指天

（万葉集）卷十一・2798

この二首は、下二句が異なっているため、この点について検討を加える。

【鰈貝】「鰈貝」という形では当該の万葉2798歌にしか用例が見られない。「あはび（鮑／鰈）」では『万葉集』に当該歌を除いて六例見られるが、平安時代では殆ど見られない。『万葉集』ことば事典（青木生子・橋本達雄監修）の「あはび（鮑・鰈）」の項目（谷口雅博）には、「二枚貝とは異なり貝殻が一片しかないところから「片恋」「片思ひ」の比喩に用いられる」とある。

【みるめ】当該の古今683歌では「海松布」と「見る目」の掛詞となっている。

『万葉集』では、主に「深海松」の形で十例確認できる。

単に「海松」のみで詠まれるか、或いは、

神風之伊勢乃海之朝奈伎尔 来依深海松 暮奈藝尔
来因俣海松 深海松乃 深目師吾乎 俣海松乃

復去反 都麻等不言登可聞 思保世流君（卷十三・3301）

のように「深目」を引き出すようにして詠まれる場合が多く、「海松布」と「見る目」で掛詞として詠む例はない。

平安時代以降になると「海松布」と「見る目」の掛詞は多数確認でき、『古今集』中でも

（題知らず）

清原深養父

満つ潮の流れひるまを逢ひがたみみるめの浦によるをこそ待て
（恋歌三・665）

が確認できる。

【あくよしもがな】「あくよしもがな」では当該の古今683歌しか見いだせないが、「よし」＋「もがな／もがな」という形では『万葉集』『古今集』で多数用例が見られる。

『万葉集』では「よし」＋「もがな」の形で十五例確認でき、うち十四例が「みむよしもがな」で、一例は「きむよしもがな」である。

『古今集』では「よし」＋「もがな」の形で、古今683歌を除いて四例確認でき、うち二例が「あふよしもがな」で、残り二例が「見るよしもがな」である。

「よし」＋「もがな／もがな」は、『万葉集』以来の表現といえる。

【小括】

古今683歌は、平安時代には用いられなくなる四句目の「あはび」を、平安時代以降によく使われるようになる「みるめ」

にし、あわせて五句目も四句目にあうようにして詠んだものと思われる。掛詞としての「みるめ」が平安時代まで見られない以上、古今683歌は（『万葉集』歌）とはいえない。

⑨

（題知らず）

よみ人知らず

須磨の海人の塩焼き衣箆をあらみ間遠にあれや君が来まさぬ

（『古今集』恋歌五・758）

大網公人主宴吟歌一首

須麻乃海人之塩焼衣乃藤服間遠之有者未著穢

（『万葉集』卷三・413）

この二首は、三、五句目が異なっているため、この点について検討を加える。

【藤服】『万葉集』中での用例は、当該歌を除くと以下の一例のみである。

大王之塩焼海部乃藤衣穢者雖為弥希将見毛

（卷十二・2971）

万葉413歌と同様に、海人などが着る粗い衣服を指す。

『古今集』中の用例は四例が確認でき、うち三例（654、841、1002）で「喪服」として用いられている。平安時代以降は、「喪服」としての「藤衣」の用例が多数見受けられる。

【箆】当該の古今758歌以外に用例が見つからなかった。片桐洋一『古今和歌集全評釈』には、「おさは『倭名抄』に「箆平佐、織具也」とあるように、織物をする時に用いる竹製

の道具。縦糸を通して整え、それに横糸を織り込んで目を詰めるのであるが、上等の物ほど目が詰まっているが、海人（漁師）が着る着物は粗末で目が粗いと言っている」とあり、二句目が「塩焼き衣」でもあることから、片桐氏の指摘に従ってよい。

【未著穢】「藤衣」が「なれる」という点で、【藤衣】で掲げた万葉2971歌と同趣向である。

万葉413歌について、直訳するならば「須磨の海女が塩を焼く時に着る藤衣は織り目が粗く、まだ着なれない」となる。恋歌として解釈すると、「間遠」に「逢瀬が稀である（ので二人の距離が遠い）」が、「未著穢」に「まだ二人は慣れ合っていない」が重ねて表現され、「逢瀬が稀であり二人の距離が遠いため、まだ二人は慣れ合っていない」と解釈できる。

【君が来まさぬ】「きみがきまさぬ」という句自体は『万葉集』中に八例みられる。類型表現であったと思われる。

当該の古今758歌は、『古今集』恋部の中でも恋五におさめられており、恋の終わりの和歌である。そのため、「間遠なのですか、あなたがちつとも来ないの」と二人の仲が冷えた様子が詠まれている。

〔小括〕

⑥の場合と同じに、古今758歌は、「間遠」を導く序詞を万葉413歌のまま用いている。

一方で三句目と五句目は別の語になっている。三句目は「藤

衣」の意が変化したためだが、同時に「箴」という平安時代でも他に例をみない表現になっている。また、「間遠」からつながる五句目については、万葉413歌と古今758歌ではそもそも歌の趣旨が異なっている。

語句の面だけでなく表現している内容も異なっていることから、古今758歌を（『万葉集』歌）と考える必要はない。

- (二)『万葉集』においても特殊であった表現を変えたもの
(二)に該当する歌は、③、⑦である。③から確認していく。

③

（題知らず）
よみ人知らず

駿河なる田子の浦波立たぬ日はあれども君を恋ひぬ日はなし

（『古今集』恋歌一・489）

可良等麻里能許乃字良奈美多奴日者安礼杼母伊敝尔古非奴日者奈之

（『万葉集』卷十五・3670）

この二首は、一、二句目が大きく異なっている。主にこの点について検討を加える。

【可良等麻里 能許乃字良奈美】「のこのうら」については当該歌を除き用例が無かった。「のこ（能許）」という地名で絞ると『万葉集』に一例（3673）見つかる。これら（3670、3673）は題詞に「到筑前國志麻郡之韓亭一舶泊経三日」於し時夜月之光皎々流照奄對「此華 旅情悽愴各陳」心緒聊以裁歌六首（筑前國志麻郡の韓亭に到り舶泊すること三日を経。時に夜月の

光皎々として流照す。奄にこの華に對し旅情悽愴す。各心緒を陳べ、聊か以て裁る歌六首」とある六首に含まれる歌である。

「からとまり」については、『万葉集』『古今集』をはじめ殆ど用例が見つからず、かろうじて『狭衣物語』に二例見られる。この二例はいずれも「唐泊」という特定の地名に関わる形で詠まれる。

これらの、題詞や用例の在り方から考えると、「からとまり」「のこ（能許）」という地名は、一般的に用いられていた語というよりは、その地に関わりのある状況の中ではじめて出てくる類の語であるといえる。

【駿河なる】「駿河なる」は、『万葉集』中には四例、『古今集』中には古今489歌を除いて一例見られる。

「駿河なる」で導かれる語としては、『万葉集』では「あへのいちぢ（阿倍乃市道）」（284）、「ふじのたかね（布土能高嶺／不盡能高嶺／不盡乃高嶺）」（317／319／2695）、『古今集』では「富士の山」（534）となっており、『万葉集』『古今集』の頃では当該の古今489歌と違い、富士山に上接している。

【田子の浦】『万葉集』中では以下の三例が確認できる。いずれも「田子の浦」単体で用いられ、当該の古今489歌のように「駿河なる」を付けるのは珍しいが、当該の万葉3670歌の「可良等麻里 能許乃字良」という特定の地名に対応させたためかと思われる。

なお、用例の一つの万葉³²⁰⁵歌では当該の古今489歌と同様に、「田子の浦」と海に関連する素材が詠まれる。「田子の浦」と海の素材をあわせて詠むことは珍しくなかったとわかる。

【恋ひぬ日はなし】『万葉集』中には当該歌を除いて二例がみられ、類句的表現になっている。

〔小括〕

古今489歌は、「筑前國志麻郡之韓亭」という場で自分の家を恋しく思う気持ちを詠んだ万葉³⁶⁷⁰歌を利用し、恋歌として新たに詠んだものと考えられ、〈『万葉集』歌〉とは考えられない。

なお、古今489歌では地名が変化しているが、例えば『古今集』巻一の17歌の「春日野」が、『伊勢物語』十二段では「武蔵野」になっているように、設定にあわせて地名が変化している例はあり、この古今489歌もそれに近いものだろう。

⑦

（題知らず）

よみ人知らず

夏引きの手引きの糸をくりかへし言しげくとも絶えむと思ふな

この歌は返しによりてたてまつりけるとなむ

（『古今集』恋歌四・703）

寄糸

河内女之手染之絲乎絡反片絲尔雖有將絶跡念也

（『万葉集』巻七・1316）

この二首は大きく一、二句目が異なっているため、この点

について検討を加える。

【夏引きの手引きの糸】『万葉集』『古今集』中では、当該歌を除いて用例はないが、他の平安時代の和歌に用例が見出せる。「夏引きの糸」のみで探すと、主に平安時代中期以降に多数見受けられる。

【河内女】「手染之絲」どちらの語も、当該歌の他に用例が見いだせない。

武田祐吉『萬葉集全注釋』には「河内の國は、外來の歸化人なども多く住み、早くから染織の技なども發達してゐた。それで特に河内女を持ち出したのだらう」とある。また、伊藤博『萬葉集釋注』を見ると、「カフチメガの訓もある。「河内女」は染織りの技術にすぐれた河内の女。」「『日本書紀』によれば、雄略朝前後、百濟からの人びとを中心とする渡来人が大阪府東部の河内の國に住みついて染織りや陶作り・鞍作りなどの作業を営んだ。それは大陸系の高度の技術として珍重された。その河内の女たちが糸車に巻きつけてつないだ糸なのだから、「片糸」（片思い）ではあっても切れることはないというのである。」とある。

これらの指摘に従うと、おそらく直後の「絡」という語、その後の「片絲」「絶」との関連から、染織りの技術を持つ「河内女」や「手染之絲」という語を詠んだと考えられる。

〔小括〕

古今703歌は、「糸（絲）」「繰る」「絶ゆ」といった縁語に関

わる要素はそのまま利用し、『万葉集』でも特殊な表現である「河内女」「手染之絲」を、平安時代から現れる「夏引きの（手引きの）糸」にして詠んだものと思われる。

言い換えれば、「夏引きの手引きの糸」は、平安時代でなければ加えようもない語であり、古今703歌は（『万葉集』歌）とは考えられない。

（三）『万葉集』の歌を下敷きにして詠まれたもの

（二）に該当する歌は、⑧である。

⑧

（題知らず

よみ人知らず）

たえずゆく飛鳥の川のよどみなば心あるとや人の思はむ

この歌、ある人のいはく、中臣東人が歌なり

（『古今集』恋歌四・720）

寄河

たえずゆくたえずゆくか飛鳥の川かはのよどめらばゆえしもるこひとのみまぐにの思はむ
不絶逝明日香川之不逝有者故霜有如人之見国（19）

（『万葉集』巻七・1379）

この二首は、下二句が異なっている。そのため、主にこの点について検討する。

【飛鳥の川／明日香川】当該歌を含めて、『万葉集』で二十例、『古今集』で五例、その他でも多数用例が確認できる。

『歌ことば歌枕大辞典』の「飛鳥」の項（村尾誠一）には、しかし、歌枕としての展開の原点となるのは『古今集』

の「世の中は何か常なるあすか川昨日の淵ぞ今日は瀬になる」（雑下・九三三・よみ人知らず）であろう。その流れの変化にしたがい、絶えず変わる淵瀬のありさまに注目して、人の世の変わりやすさを託す歌枕として詠まれ続ける。

とあり、『古今集』中でもそれ以後、古今933歌に依って詠まれる歌が多数である。

逆に、「飛鳥川／明日香川」を詠みながら古今933歌に依らず、上三句が同じであるため、当該の古今720歌は万葉1379歌を意識して詠まれたといえる。

【心あるとや人の思はむ／故霜有如人之見国】「ゆゑ」「心あり」「みまぐ」などは『万葉集』でも『古今集』でも用例が多数見られる。

ただし「みまぐ」については、「みまぐほし」など、他の語を付けた形で詠まれる場合が殆どである。特に『古今集』ではその形でしか用例がみられず、以降も「みまぐ」を単独で用いる例はあまりない。しかし、『万葉集』には「みまぐ」を単独で使用する例が万葉1379歌の他にも散見され、『万葉集』では珍しい用法でもなかったと考えられる。

【小括】

古今720歌と万葉1379歌を比べると、一／三句目と同様であるが、四、五句目が異なっている。

異なっている句を見ると、万葉1379歌の五句目の「みまぐ」

について、用法は『万葉集』の頃とは異なっているものの、平安時代でも使う語ではある。しかし、この語が「みまく」でなく「思はむ」になっていることから、古今720歌は使うものの耳慣れなかった「みまく」を時代に合致するように詠んだとみられ、古今720歌は万葉1379歌を踏まえて平安時代に詠まれた歌であり、『万葉集』歌ではないと考えられる。

以上、本節では先行研究で指摘されてきた歌について分析を加えた。

これまで見てきた歌は、語句を見ると『万葉集』の歌との違いがあるが、そうした違いは、専らもとの『万葉集』の歌の語を『古今集』の頃によく用いられていた語に置き換えたことで生じたものであることが明らかとなった。語や句の表現に整合性があることや歌全体の意味がきちんと通ることを考えあわせると、『万葉集』歌と捉える必然性はなく、『万葉集』の歌を踏まえて新たに詠まれた歌と考えて問題はない。

また、『万葉集』と一致する①②があるが、これらこそが撰者のミス、或いは伝誦、別資料の歌による混入である可能性があると考えた方がよい。

小川氏は、「二、先行研究と問題の所在」で引用した箇所の続きで、以下のように論じている。

古今集歌における『万葉集』の広汎な影響についても、所謂「萬葉歌」とは別次元のものとして見るのではなく、

また萬葉集時代からの「伝誦」によるものと無媒介に捉えるのでもなく、古今集時代の作者たちが、「書物」としても「萬葉集」を自らの時代の「和歌」の資源としていかに積極的に利用したかを示す痕として、統一的に捉えるという新たな見方が可能となるであろう。『古今和歌集』の基層には、「書物」としての『萬葉集』が存在していたと思われる。

「古今集時代」の指す時期、また、積極的な利用の詳細などは把握できないが、『古今集』中の『万葉集』の歌について、古今集時代の作者が詠作資料として書物の『万葉集』を訓み、訓んだ『万葉集』の歌を「古今集時代の「和歌」としてふさわしいように意識的に改変した」と考えている。

しかし本節での分析結果をふまえると、単に、訓んだ『万葉集』の歌を『万葉集』の歌として『古今集』の頃の歌に相応しいよう改変した、ということに留まらず、実態としては、『万葉集』の歌をもとにしてまったく新しい歌を詠んだものと考えられる。

もっとも、本節での考証のみでは、『万葉集』の歌が口承、書承されていく過程で平安時代に用いられるようになった語句に変化しただけ、と考えることも可能である。そこで、次節では、広く『古今集』の歌に見られる『万葉集』の歌の享受を確認し、それによって、本節でみた事象が③④⑤の歌に限らずに起こっていることを確認したい。

三、『古今集』歌の『万葉集』利用

前節では、これまでの研究で〈『万葉集』歌〉とされた歌を分析し、〈『万葉集』歌〉とされた歌は実は『万葉集』の歌をもとにして新たに詠まれた歌であった、と結論付けた。つまり、『古今集』にみられる『万葉集』の歌の享受、利用の形の一つではないか、ということである。

『古今集』にみられる『万葉集』享受については、紀貫之をはじめとする古今集撰者個人の享受に関する先行論を除くと、既に鈴木日出男氏⁽²⁰⁾が

もとより、『万葉集』と『古今集』の歌を比べると、四季の自然景物や恋歌の類型表現が、意外なほど共通している。ということは、新たな歌風を樹立することになった『古今集』時代の歌々といえども、『万葉集』からの素材なり表現類型なりをすこぶる多く提供されながら成ったということである。…『古今集』時代の歌の多くが、そうした伝承を新たな歌風のもとに捉え直すところから産み出されたと言っても過言になるまい。たとえば、万葉以来の素材を、王朝人好みの漢詩の趣向で再構成したような歌がすこぶる多い。

と、表現の類型性を視座として論じている。この他、田中常正氏⁽²¹⁾、鈴木宏子氏⁽²²⁾、宇佐美昭徳氏⁽²³⁾などが論じている。特に、田中氏、宇佐美氏の論は、特定の和歌を踏まえて新しく和歌

を詠む、古歌の利用という観点から論じている先行研究である。⁽²⁴⁾しかし、田中氏の論は『古今集』のよみ人知らずの恋歌を上句と下句に分け、それぞれ似通った表現を調査するものである。また、宇佐美氏の論も『古今集』と『万葉集』の恋歌について、類句の位置を集計し、『新古今集』の本歌取りと比較する形で考察を行うものである。つまり、両氏とも『万葉集』と『古今集』の恋歌について、歌の形式の点から先行歌利用について論じている。しかしこの方法では、先行歌のどの部分をどのように利用しているのか、或いは、どういった理由で先行歌から変化させたのか、といった先行歌利用の表現面での実態をつかむことができない。

また、『古今集』の中には

（題知らず

よみ人知らず）

ひさかたの天の河原の渡しし守君渡りなばかち隠してよ

（『古今集』秋歌上・174）

という歌があり、一首の意は「（ひさかたの）天の川の渡しし守よ。あの人が渡つて来たのなら、楫を隠しておくれ（あの人が帰れないように）」である。一方で『万葉集』に

吾隠有櫂棹無而渡守舟将借八方須臾者有待^{わがかくせるかぢさななくてわたしもりふねかさももしばしありまて}

（巻十・2088）

という歌があり、一首の意は「私が隠した楫や棹がなくて、どうして渡し守が舟を貸すでしょうか（いや、貸すことはできない）。しばしそのままお待ちなさい」である。古今174歌は、

この万葉²⁰⁸⁸歌と同様の発想をしている、という指摘が注釈書ではよく見受けられる。

『古今集』と『万葉集』のつながりを考える上では、田中氏や宇佐美氏のように、形式面に着目して先行歌利用のあり方を考察することも重要である。しかし、こうした考察方法だけでは、この七夕歌のような、表現、発想摂取での先行歌利用は見逃されてしまう。

表現や発想での利用は、注釈書の類が詳しく指摘している。しかし、こうした注釈書でも、紙幅の都合もあり充分に検討されてはいない。そこで本節では、前節と同様の方法で『古今集』の歌に分析を加え、『万葉集』の歌の享受、利用の様相を確認したい。具体的には、先行研究において〈『万葉集』歌〉と目されてきた歌以外の、『万葉集』の歌をもとに詠んだとされる歌に分析を加え、前節で論じた『万葉集』の歌の利用が『古今集』の他の歌でも見られることを確認する。また、こうした考察を通して、前節で分析した歌が〈『万葉集』歌〉ではなく『万葉集』の歌を利用し新しく作られた歌であることの裏付けとしたい。なお、調査方法などについては、前節と同様の方式を採用する。

調査対象となる『万葉集』の歌の利用が見られる『古今集』の歌を集めるため、日本古典文学大系、新潮日本古典集成、新日本古典文学大系、新編日本古典文学全集の『古今和歌集』、片桐洋一『古今和歌集全評釈』（講談社）、高田祐彦『新版

古今和歌集 現代語訳付き』（角川ソフィア文庫）の注釈を確認した。その際、語彙への注釈以外で特定の『万葉集』の歌の影響が指摘された歌を調査対象とした。また、『万葉集』と『古今集』の類歌を列挙した先行研究である安田氏、川口氏の論考で取り上げられた歌も調査対象とした。

このようにして集めた歌の数がありにも膨大であるため、本節ですべてを取り扱うことはできない。したがって、『万葉集』歌利用に関する前節の（一）（三）の分類と合致する歌であり、また、前節で取り扱った歌が皆「よみ人知らず」の歌であったことに鑑み、本節でも「よみ人知らず」歌を対象として、各歌の考察を進めていく。

（一）『万葉集』では使用されたが『古今集』の頃には使用されなくなった語や句を、『古今集』の頃から使われる表現にしたもの

（題知らず）
よみ人知らず

夕されば衣手寒しみよしのの吉野の山にみ雪降るらし

（『古今集』冬歌・317）

ゆふさればころもこもむしたかまつのやまのみにゆきそりりたる²⁷

（『万葉集』卷十・2319）

この二句は、三～五句目が異なっているため、その違いとともに、一、二句目の一致について着目して検討を加える。【夕されば衣手寒し】「夕されば」では、『万葉集』に当該の万葉²³¹⁹歌を除き二十八例、『古今集』に当該の古今³¹⁷歌を除

き三例あり、その他の歌集にも多く用例が見られる。また、「衣手」も『万葉集』に当該歌を除き四十八例（そのうち二例は「衣手寒し／衣手寒き」）、『古今集』に当該歌を除き三例ある。どちらの語も、『万葉集』以来よく使われる語である。

しかし、この二つの語を近接して用いる例は非常に少なく、『万葉集』に当該歌を除き一例、その他『古今和歌六帖』に一例、『家持集』に一例ほど用例が確認できるのみであった。さらに、『古今和歌六帖』は『万葉集』の重出歌、『家持集』の例は当該の古今317歌を採った可能性があるため、実質『万葉集』の一例のみである。

このことから、「夕されば」と「衣手（寒し）」を近接して用いるのは非常に稀であるといえ、逆に、当該の古今317歌が万葉2319歌を踏まえた歌である可能性は高い。

【吉野】「雪」「吉野」という地名の用例は、『万葉集』で五十九例、『古今集』で二十二例存在する。そのうち「吉野」と「雪」がともに詠んだ例は『万葉集』では四例、『古今集』で八例見られる。『万葉集』では「吉野」の約6%が「雪」と共に用いられる一方、『古今集』では同様の組み合わせが約36%に増える。このことから、『万葉集』の頃から存在していた「吉野」と「雪」の取り合わせは、『古今集』以降さらに広く浸透したことが窺える。

【高松】この語は『万葉集』で万葉2319歌を除き五例が見出せるが、平安時代以降はほぼ見られない。

【小括】

『万葉集』から平安時代に至るまで「夕されば」から「衣手（寒し）」へつながらる例が少ないこと、歌意に大きな違いがないことから、古今317歌は万葉2319歌を踏まえて詠んだ歌である可能性が高い。

第三句以降の語句が異なるのは、「高松」が『万葉集』以降使われないことに起因する。代わりに「雪」という点から『万葉集』以来の表現で平安時代以降「雪」と取り合わせてよく詠まれた「吉野」が出てきたのだろう。

（よみ人知らず）

葦鴨の騒ぐ入江の白波の知らずや人をかく恋ひむとは

（『古今集』恋歌一・533）

あしたのさけのくさのしすげのしせむのこころなるも
葦多頭乃颯入江乃白菅乃知為等乞痛鴨

（『万葉集』卷十一・2768）

大きく異なるのは、一、五句目であるため、その点について検討を加える。

【葦鴨】【葦多頭】「葦鴨」も「葦多頭（葦鶴）」も、『万葉集』から平安時代に至るまで和歌に詠まれた語である。「葦鴨」については、『古今集』に当該歌を除き用例は見られないが、『万葉集』では三例、『後撰集』『拾遺集』でそれぞれ一例ずつ見られる。「葦多頭（葦鶴）」は、『万葉集』で当該歌を除き三例、『古今集』で四例が見られる。

どちらの語も使用頻度は、『万葉集』から平安時代に至る

まで大差はないが、語がどのように用いられているかが異なる。

「葦多頭（葦鶴）」の用例を見ると、まず『万葉集』の方では

君^{きみ}爾^に戀^{こひ}痛^{いた}毛^も為^な便^{すべ}奈^な美^み蘆^{あし}鶴^つ之^の哭^{なみ}耳^{みみ}所^し泣^な朝^{あさ}夕^{ゆふ}四^よ天^に

（卷三・456）

草^{くさ}香^か江^え之^の入^い江^え二^に求^{もと}食^く蘆^{あし}鶴^つ乃^の痛^{いた}多^た豆^{まめ}多^た頭^{あたま}思^{おも}友^{とも}無^な二^に指^さ天^{てん}

（卷四・575）

湯^ゆ原^{はら}爾^に鳴^な蘆^{あし}多^た頭^{あたま}者^は如^{ごとく}吾^{われ}妹^{いも}爾^に戀^{こひ}哉^や時^{とき}不^ふ定^{さだ}鳴^な

（卷六・961）

となり、当該歌も含めて考えると、「なく」「さわぐ」など、詠まれ方が定まっていらない。一方で『古今集』においては、

（題知らず）
よみ人知らず

忘^{わす}らる^る時^{とき}しなけれ^ば葦^{あし}鶴^つの思^{おも}ひ乱^{みだ}れて音^{おと}をのみぞなく

（恋歌一・514）

（題知らず）
兼覽王

住^すの江^えのまっほ^ど久^{ひさ}になりぬれば葦^{あし}鶴^つの音^{おと}になかぬ日はなし

（恋歌五・779）

法^ほ皇^{こう}西^{せい}河^がにおはしましたりける日^ひ「鶴^つ、洲^すに立てり」といふことを題にて、よませたまひける

（貫之）

あしたづのたてる川^か辺^へを吹^ふく風^{かぜ}に寄^よせてかへらぬ波^{なみ}かとぞ見る

（雑歌上・919）

寛^{かん}平^{へい}御^み時^{とき}、歌^{うた}奉^{ほう}りけるついでに、奉^{ほう}りける

大江千里

葦^{あし}鶴^つの一人^{ひとり}おくれて鳴^なく声^{こゑ}は雲^{くも}の上^{うへ}まで聞^{きこ}えつかなむ

（雑歌下・998）

といった用例が見出され、題が与えられていた古今919歌を除けば、すべて「葦鶴」は鳴くものとして詠まれる。先に掲げた万葉456、961歌でも「葦鶴」は鳴くものと詠まれることから「万葉集」以来の「葦鶴」が鳴く、という表現が平安時代では優勢になったのだろう。

「葦鴨」の方は、『万葉集』では、

葦^{あし}鴨^{かも}之^の多^た集^{あつ}池^{いけ}水^{みづ}雖^{なほ}溢^{あふ}儲^{もろ}溝^{みぞ}方^{かた}尔^に吾^{われ}将^{まさ}越^こ越^え八^や方^{かた}

（卷十一・2833）

右一首寄水喻思

平^へ布^ふ能^の佐^さ伎^ぎ 婆^は奈^な知^ち利^り麻^ま我^が比^ひ 奈^な伎^ぎ佐^さ尔^に波^は 阿^あ之^の賀^が

（卷十七・3993）

毛^も佐^さ和^わ伎^ぎ 佐^さ射^し礼^れ奈^な美^み 多^た古^こ能^の之^の麻^ま 等^と妣^は多^た毛^も登^と保^ほ里^り 安^あ之^の我^が母^も能^の

（卷十七・4011）

須^す太^た久^く舊^{ふる}江^え尔^に 乎^と等^と都^と日^ひ毛^も

という三例があげられる。「葦鴨」は「すだく」「さわぐ」などの語と共に詠まれる。

以上の「葦鴨」「葦多頭（葦鶴）」の用例を踏まえ、今一度当該の万葉2768歌と古今533歌を比べる。まず、二句目の「騒ぐ」という共通する語について、「葦鶴」の用法が定まっていなかった『万葉集』では、「葦鶴」が「騒ぐ」という表現で問題なかった。しかし、「葦鶴」は鳴くものとして詠まれた平

安時代では、「葦鶴」と「騒ぐ」という組み合わせは違和感を生じさせる。そこで、当該の古今533歌では『万葉集』の頃から「すだく」「さわぐ」という語と詠まれた「葦鴨」の語に代えたと考えられる。

【白菅】『万葉集』で当該歌の他に三例見られる。しかし、平安時代以降になると用例が見られない。なお、『万葉集』で見られる例は、当該歌以外の三例とも「しらすげのまのものはりはら（白菅乃（之）真野乃（之）榛原）」という形である。

【白波】「白波」は『万葉集』以来よく見られる語で、『古今集』でも当該歌を除いて八例みられる。当該歌では、第四句目の「知ら（知る）」を同音で引き出すために用いられている。

【乞痛】「こちたし」は『万葉集』では当該歌を除いて十例みられる。但し、当該歌と同じように「人のうわさがうるさい。煩わしい。」（『時代別国語大辞典 上代編 三省堂』の意味で用いられているのは、うち九例である。平安時代以降は和歌に詠まれることはほぼなく、『万葉集』の重出と考えられる歌を除けば、源俊賴の和歌で二例確認できるのみである。平安時代では、「こちたし」が「はなはだし。大げさだ。」（『時代別国語大辞典 上代編』）という意味で用いられ、和歌に詠まれにくくなったと考えられる。

【小括】

まず、古今533歌と万葉2768歌の「葦鴨」と「葦多頭（葦鶴）」

の違いについては、平安時代以降「葦鶴」は「鳴く」ものとして定着したために、二句目の「騒ぐ」に相応しく「葦鴨」を使った。

「白菅」と「白波」については、「白菅」が平安時代には詠まれないため、「しら（白）」から「知ら（知る）」を導くという点は踏襲し、「白波」に置き換えたと考えられる。

また、五句目の「乞痛（こちたし）」は、平安時代以降、『万葉集』とは異なる意味で使用される都合、違う語に代えて詠まれたと推測される。

二首を比べてみると、異なる箇所は平安時代に馴染みのある表現になっただけで、序詞などはそのまま用いられているとわかる。

（二）『万葉集』においても特殊であった表現を変えたもの

（題知らず）

よみ人知らず

あしひきの山ほととぎすわがごとや君に恋ひつついねがてにす

（『古今集』恋歌一・499）

古尔有兼人毛如吾歟妹尔戀乍宿不勝家牟

（『万葉集』卷四・497）

この二首は、一、二句目が大きく異なっているため、この点について検討を加える。

【山ほととぎす】「ほととぎす」は『万葉集』以来よく詠まれ、『万葉集』で百五十三例、『古今集』で古今499歌を除き四十一

例見られる。そのうち「山ほととぎす」という形では『万葉集』で七例、『古今集』で古今499歌を除き七例である。さらにこのうち当該の古今499歌のように「あしひきの」と枕詞も詠まれるものは『万葉集』で四例、『古今集』で当該歌を除き一例である。

『万葉集』『古今集』の「ほととぎす」について用例数を基準に比較すると、『古今集』では『万葉集』よりも「山ほととぎす」で詠まれることが多いが、枕詞「あしひきの」を伴うことは非常に少ない。一方、『万葉集』では『古今集』よりも「山ほととぎす」では詠まれにくい、詠まれた場合には枕詞「あしひきの」を伴うことが多い。

【古尔有兼人毛】「いにしへにありけむひと」という形では、『万葉集』には当該歌を除き三例あるが、『古今集』には用例がない。「いにしへにありける○○」という形では『万葉集』に更に二例あるが、「いにしへにありけむひと」も含め長歌で用いられることが多い。「いにしへ」という語で見ると、『万葉集』で当該歌を除き五十六例、『古今集』で四例見つかり、「いにしへにありけむ（ける）○○」という形が特殊であると推測される。

「いにしへにありけむひと」の用例を確認すると、『万葉集』の

詠葉

いにしへにありけむひとむがごとかみわのひばらにかざしをりけむ
古尔有兼人毛如吾等架弥和乃檜原尔挿頭折兼

（右二首柿本朝臣人麻呂之歌集出）

（巻七・1118）

という歌が、当該歌の上三句とほぼ一致する。当該歌が「柿本朝臣人麻呂歌四首」とあるうちの一首であること、万葉1118歌の左注から、「いにしへにありけむひとあがごとか／わがごとか」は、人麻呂特有の表現だったとされる。

【わがごとや／如吾敷】『万葉集』に当該の万葉497歌と先掲万葉1118歌のみ、『古今集』に当該の古今499歌のみ見られた。「わがごとや（か）」という句自体はよく使われるが、初句や四句目に使用されることが多く、先述の三例を除き三句目に用いる例は平安中期まで出てこない。平安中期以降も、三句目に「わがごとや（か）」を用いる例は多くない。

このことから、当該の古今499歌は万葉497歌をもとに詠んだ可能性が高い。

【小括】

万葉497歌と古今499歌は、一、二句目が異なるものの、構成や歌の意味などに違いはない。特に、三句目に「わがごとや」を用いる例が『万葉集』『古今集』では当該歌の他に、万葉497歌同様、人麻呂の詠んだ万葉1118歌しか見られない。このことから、古今499歌は人麻呂の歌、なかでも下の句が一致する万葉497歌を踏まえた可能性が高い。

古今499歌の一、二句目の「あしひきの山ほととぎす」に關しては、万葉497歌の一、二句目の「古尔有兼人」が『古今集』で使用されず、さらに、この表現自体、人麻呂特有のものだった

たことから詠み代えたと考えられる。

(三) 『万葉集』の歌を下敷きにして詠まれたもの

題知らず

よみ人知らず

須磨の海人の塩焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり

（『古今集』恋歌四・708）

（あまのしかの）
之加乃白水郎之焼塩煙風乎疾立者不上山尔輕引

右件歌者古集中出

（『万葉集』巻七・1246）

この二首については、一句目と、下二句が異なっている。そのため、これらについて検討を加える。

【須磨】『万葉集』で三例、『古今集』で当該歌を除き二例（758、962）見られる。

『歌ことば歌枕大辞典』の「須磨」の項（藤平泉）で、『万葉集』の「須磨」について「海人」の「藻塩焼く」所というイメージが見られ、恋歌のための比喩的表現として用いられており、当時からよく知られた名所であったことがわかる。」と指摘される。現に、『万葉集』の三例（413、947、3932）はいずれも恋歌である。『古今集』での用法に関しては、古今708、758歌があげられ、「ともに恋歌における比喩表現として「塩焼く煙」「塩焼き衣」が用いられたよみ人しらず歌（伝承歌）であり、『万葉集』以来の伝統の上に立っている。」と記述される。用例のあり方からも、『万葉集』と『古今集』において「須磨」は恋歌の題材として詠むのが主だと考えら

れる。

【之加】『万葉集』では当該歌を除き二十六例見られ、このうち「しかのあま」、或いは「しか」と「あま」を共に詠むものは当該歌を除き十例ある。

『古今集』では和歌で詠まれる用例はないが、詞書で五例見られる。このうち四例が「志賀の山越え」となっており、寺への参詣を指すことが窺える。

【思はぬ方にたなびきにけり／立者不上山尔輕引】どちらも、風が強いために煙が（当該の万葉1246歌では「山」、古今708歌では「想定外の方」に）たなびいている、という意味である。

しかし、当該歌は、『古今集』恋部に収められること、先述の「須磨」との関わりから、煙がたなびく光景に相手の心が他の人へと移ろう様を重ね合わせた歌だとわかる。

【小括】

どちらの歌も、序詞がほぼ一致すること、古今708歌が恋歌ということ差し引くと歌意もおよそ近いことから、古今708歌は万葉1246歌をもとに詠まれたと考えてよいだろう。

古今708歌と万葉1246歌で、初句が「之加（志賀）」と「須磨」と異なるのは、「之加（志賀）」が、『古今集』の頃には「志賀の山越え」として寺への参詣を指すことが多く、水辺の景と詠むことはなくなったことによる。また、『万葉集』以来「須磨」が恋歌の題材として詠まれたこともあり、恋歌である古

今708歌では、「之加（志賀）」が「須磨」になったと考えられる。

以上、『万葉集』の歌を利用して詠まれたと考えられる『古今集』の歌に分析を加えた。仮に前節で扱った歌を〈『万葉集』歌〉と見做すのであれば、本節で取り上げた歌が〈『万葉集』歌〉の範疇に含まれないのは不自然である。また、〈『万葉集』歌〉とそうでない歌の違いも判然としなくなる。前節で扱った歌はやはり、『万葉集』の歌を利用して詠まれた新しい歌と考えられる。

また、以上の考察を通して、単に類句や類型表現、形式を踏襲するに留まらず、『万葉集』の特定の歌を踏まえて詠まれた歌が『古今集』には存在しているということを示した。

このことは、古く、よみ人知らず歌の段階から既に『万葉集』が「積極的に利用」されていたことを明らかにするための手掛かりにもなるだろう。

おわりに

本論文では、『古今集』の〈『万葉集』歌〉入集問題について考察してきた。

まず、先行研究で〈『万葉集』歌〉だと指摘されてきた歌について実際に分析を加えた。その結果、これまで〈『万葉集』歌〉だとされた歌は、〈『万葉集』歌〉と考えなければならな

い必然性はなく、むしろ『万葉集』の歌をもとにして新たに詠まれた歌だと考えられる、と結論付けた。

第三節では、この結論を踏まえ、第二節で分析した歌以外にも『万葉集』の歌を踏まえて詠まれたと考えられる『古今集』の歌が存在することを示した。これにより、『万葉集』の歌をもとに新たに歌を詠む現象が、第二節で扱った歌以外にも当てはまることを確認すると同時に、第二節で分析した歌は〈『万葉集』歌〉として捉える必然性がないことを改めて明確にした。また、先行研究では、『古今集』における『万葉集』享受を、類句などの形式面や表現の継承といった大枠で考察してきたのに対し、本論では、『万葉集』中の特定の歌を踏まえて新しく歌を詠むと、より具体的に明らかにした。

『古今集』にみられる『万葉集』享受については、紀貫之ら古今集撰者を除けば、先述したように類句や表現形式など、大きな流れの中での継承という観点、或いは、〈『万葉集』歌〉入集問題で論じられた。こうした研究が進められてきた背景には、小川氏の指摘する「萬葉集時代からの「伝誦」による」無媒介な影響が『古今集』の歌に反映されているとする見解すなわち『万葉集』以来よく用いられてきた表現・形式が、詠み手がもとの『万葉集』の歌を知らなくても、自然に歌中に出現してきたとする見解や、撰者たちが『万葉集』を充分に理解できていなかった結果として、伝誦歌にせよ別資料の歌にせよ〈『万葉集』歌〉であることが見抜けずに入集

することになったという認識が存在したと考えられる。

しかし、本論で分析した歌はすべて『古今集』の中でもより古いとされる「よみ人知らず」の歌であり、個別に検討した結果、各々の歌が『万葉集』の特定の歌を踏まえて詠まれたことが明らかとなった。このことから、古今撰者たちに限らず、我々の想像以上に古くから、『万葉集』の歌がまさしく『万葉集』の歌として人々に享受され、作歌時の素材として利用されたことが窺われる。

今後、『古今集』にみられる『万葉集』享受に関する研究を進展させる上では、表現面や形式面といった大枠での考察だけでなく、一首一首を取り上げて検討を加えていくようなより詳細な研究も必要かと思われるのである。

注

- (1) 高田祐彦訳注『新版 古今和歌集 現代語訳付き』（二〇一二年五版、角川文庫）より引用し、傍線は筆者による。後の『古今集』の引用も同書による。
- (2) 「〔訓み〕を踏まえた萬葉集歌の改変―『古今和歌集』の「萬葉歌」をめぐる―」（『萬葉学史の研究』二〇〇七年、おうふう）（初出：『青山語文』第三十六号、二〇〇六年三月）
- (3) 『万葉集』の引用は、この先すべて佐竹昭広・木下正俊・小島憲之『補訂版 萬葉集 本文篇』（二〇一八年補訂版十一刷、塙書房）による。
- (4) 田中喜美春「万葉歌排除」（『古今集改編論』二〇一〇年、風

間書房）では、墨滅歌の古今1108歌について、諸本のこの歌の有無などから、後世の人間が万葉歌であるために切り出した、としている。こうした書写における『万葉集』の歌の排除も含めると、『古今集』への『万葉集』の歌の入集の指摘は「八雲御抄」より時代をさかのぼるかもしれない。しかし、こういった意図で『万葉集』の歌を排除したのか、またいつの段階で排除されたのかなどの判別が難しいため、本論では除外して考える。

- (5) 片桐洋一監修、八雲御抄研究会編『八雲御抄 伝伏見院筆本』（二〇〇五年、和泉書院）より引用。但し、書き下し文は筆者による。
- (6) 「平安時代の文学と萬葉歌」（『萬葉集講座 第四巻 史的研究篇』一九三三年、春陽堂）。なお、これ以降、引用した先行研究本文の漢字は、書名等を除いて通行の字体に改めている。
- (7) 「勅撰集と萬葉歌」（『萬葉清話』一九四二年、靖文社）
- (8) 「第四章 萬葉集から見た古今集」（『古今集時代の研究』一九三二年、六文館）
- (9) 「古今時代の萬葉研究」（『萬葉研究史』一九四八年、要書房）
- (10) 山田孝雄「萬葉集の傳來と研究史の概略」（『萬葉集と日本文藝』一九五六年、中公論社）、木下正俊「萬葉・古今雜考」（関西大学国文学会『国文学』第七十三号、一九九五年十二月）、大久保正「古代萬葉集研究史稿（その二）―古典以前の萬葉研究―」（『北海道大学文学部紀要』一〇、一九六一年十一月）、同氏「万葉集の伝来と享受」（『万葉集の諸相』一九八〇年、明治書院）などが同様の立場をとる。
- (11) 「古今の萬葉」（『萬葉』第六十四號、一九六七年七月）
- (12) 「同形歌小異歌攷―萬葉集の本質―」（『萬葉』第五十九號、

一九六六年四月）

(13) 注2に同じ。

(14) 『古今集』中の『万葉集』の歌そのものについて多少なりとも検討を加えているものとしては、中西進「続・万葉集の形成（上）——平安朝文献の意味——」（『成城文藝』第五〇号、一九六八年六月）、川口常孝「万葉から古今へ」（『万葉歌人の美学と構造』一九七三年、桜楓社（初出…日本大学国文学会『語文』第二十三輯、一九六六年三月））、宇佐美昭徳「古今和歌集論 万葉集から平安文学へ」（二〇〇八年、笠間書院）などがある。しかし、これらの論文では『万葉集』歌に対する検討や分類が行われているものの、論文の主眼が別のところにあるために分析が不十分である。

(15) 最終閲覧日 二〇二〇年十二月三十一日

(16) 訓は「たかやま」十七例、「たかのやま」一例、「かぐやま」二例。「かぐやま」の訓は、巻第一の中大兄皇子の三山歌である13、14歌にみえる。

(17) 『歌ことば歌枕大辞典』「奥山」の項

(18) 狭衣が飛鳥井の女君が唐泊（韓泊）のあたりで入水した話を聞いて詠んだ歌（巻二）と、太宰大貳になった道成が唐泊（韓泊）まで来たところで、かつて飛鳥井の女君が入水したことを思い出すなどして詠んだ歌（巻四）で出てくる。

(19) 『校本萬葉集』をみると、五句目の「見國」の訓について、寛永版本では「ミラクニ」として訓まれる。また、訓の異同として、類・紀・広・（京は右側に楮で）「ミナクニ」、細・宮・「ミククニ」、古「ミマクニ」がある。

(20) 『古代和歌史論』（一九九〇年、東京大学出版）。引用箇所は同書の「第二編 九世紀の文学 第四章 万葉歌の伝承」。

(21) 『万葉集より古今集へ——古今集恋歌の読人知らずの歌の構成——』一九八七年、笠間書院

(22) 『古今和歌集表現論』（二〇〇〇年、笠間書院）では、「雪」と「花」などの見立てや特定の言葉について、『万葉集』から『古今集』の間で継承されている点、変化した点などを調査している。

(23) 注14に同じ。

(24) 『古今集』における『万葉集』の歌の利用ではないものの、「古歌」の利用という観点からの研究では、佐藤明浩「『古歌』の再生ということ」（『院政期和歌文学の基層と周縁』二〇二〇年、和泉書院（初出…伊井春樹先生御退官記念論集刊行会編『日本古典文学史の課題と方法——漢詩 和歌 物語から説話 唱導へ——』二〇〇四年、和泉書院））があり、本論もこの論考を参考にしている。

(25) 注8に同じ。

(26) 注14に同じ。

(27) 三句目の「高松之」の訓について、『校本萬葉集』では「タカマトノ」として載る。また、訓の異同として、類「たかまつの」（「元」と）の横に楮で「つ」がある。

(28) 『校本萬葉集』をみると、五句目の「乞痛鴨」の訓について、寛永版本では「コヒイタムカモ」と訓まれる。また、訓の異同として嘉・類「こひいたらむかも」がある。その他、諸説として代初「コチタメルカモ」、考「コチタカルトモ」、補「コヒイタムカモ」がある。

(29) 確認できた源俊頼の用例は『散木奇歌集』の以下の二首にみられるものである。

にはかにこちふくとてこじまといふ所にとどまりて、くんだりにはこちはよりしものをなど思ひて、それさへことだがひ

たる心ちしてよめる

思へどもこちたき旅の涙かなはじめこしまはなげきやはせし

（第六・悲嘆部・801）

（殿下にて恋のこころをよめる）

としへたるひまのうゑきのこちたさをしらでも人に身をかふるかな

（第七・恋部上・1020）

但し、『万葉集』に見られたような「人のうわさがうるさい。

煩わしい。」といった意味で用いられているとは考えにくい。

（30）『古今和歌集』三例のうちの残りの一例は、

田村の御時に、事にあたりて、津の国の須磨といふ所にこもりはべりけるに、宮のうちにはべりける人につかはしける

在原行平朝臣

わくらばにとふ人あらば須磨の浦に藻塩垂れつつわぶと答へよ
（雑歌下・962）

という在原行平が須磨で謹慎している最中に詠んだ歌である。

そのため、この用例については「須磨」は詠まれているものの、行平の状況に紐づけられて「須磨」が詠まれているため、『万葉集』

『古今和歌集』の他の用例とは別で捉えるべきである。この歌を除けば、「須磨」が詠みこまれる歌はすべて恋歌になる。

（31）『歌ことば歌枕大辞典』には「志賀の山越え」について「京都の北白川（左京区北白川）から山中峠付近を越え、志賀の里（滋賀県大津市北方）へ出る山道。志賀寺（崇福寺）参詣にも利用された。」（大岡賢典）とある。

【附記1】

本稿は、修士論文の第二章、第三章を併せ、手を加えたものである。修士論文、また本稿の執筆に際し、ご指導くださった滝川幸司先生に深くお礼申し上げます。

【附記2】

昨年に急逝された加藤洋介先生のご霊前に本稿を謹んで捧げるとともに、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

（かわかみ・りな 本学大学院博士前期課程修了生）